



あるじでえ

No. 116

世田谷区教育委員会 民家園係
〒157-0067 世田谷区喜多見 5-27-14

◎ 次大夫堀公園民家園

☎ 03(3417)8492

◎ 岡本公園民家園

☎ 03(3709)6959

平成3年2月1日 発行
平成12年11月 増刷

旧浦野家住宅土蔵



写真1 旧浦野家住宅土蔵・全景（岡本公園民家園内）

一 区指定有形民俗文化財第1号一

○文化財指定年月日

昭和56年4月22日

○旧所在地

世田谷区喜多見7-8

○復元場所

区立岡本公園民家園内

○復元完了

昭和55年3月竣工

○規模

桁行 3間 (5.46m)

梁間 2.5間 (4.55m)

総高 6.60m

○延床面積

12.5坪 (41.3㎡)

[1階:7.5坪、2階:5坪]

この土蔵が建っていた浦野家は、世田谷区喜多見7丁目の地にあります。屋敷の東側には入間道（不動道）と呼ばれる古道が走り、また、北側沿いにはかつて次大夫堀（現：緑道）が流れていました。浦野家のジョウグチはこの入間道に面して開かれ、そのすぐ北側の次大夫堀には、瀧下橋と呼ばれる橋が架けられていました。当家の屋号を『橋場』と呼ぶのもこのためでしょう。この入間道沿いには今も樺並木が残り、昔の面影を偲ばせます。

浦野家の家歴については、菩提寺である慶元寺の過去帳によると、初代と思われる五左エ門が慶安2年(1649)に没していることから、江戸時代初期よりこの喜多見の地

に居住していたことがわかります。江戸時代の末には、九代目桑次郎が余業として油（菜種油）の商いを始め、これ以後屋号を『油屋』とも称すようになりました。当家にはこの時の商いの古文書が残っており、これによると油の外に、木炭や煙草、雑貨なども扱っていたようです。また、この頃には主屋の離れや蔵などが建てられ、商いが繁盛して浦野家が繁栄した様子をうかがうことができます。

さて、この蔵は、屋敷のジョウグチ近くに西側（主屋）に向いて建てられていました。建築当初は穀蔵として建てられたようですが、その後、油屋の蔵として使われるようになると、下屋部分に床板を貼って店

舗としたり、第2次世界大戦中は軍用物資の保管庫として、また、戦後は住宅としても使用されていました。このため、昭和53年に解体保管された際には、内・外部ともにだいぶ改修が施されていましたが、この時の解体調査によって、旧状の痕跡もわかり、当初の形式が明らかになりました。

桁行3間、梁間2.5間の規模を持つ総2階建ての土蔵造りで、入口を平入りとし、ここに桁行3間、梁間1間の土庇が付いていました。外壁は漆喰で仕上げられ、屋根は切妻造りの置き屋根形式で、当初から棧瓦が葺かれていました。しかし、一般的に農家の土蔵は、土壁のまま茅葺き屋根のものが多く、こうした土蔵は村でもたいへん珍しかったようです。また、この瓦には『二子権瓦』や『砧製造舎』の刻印がされており、江戸時代末期から明治時代にかけて、前者は二子新地（川崎市）で、後者は宇奈根（世田谷区）で焼かれたものを使っていることがわかりました。

構造は、布石の上に土台を置き、平側で3尺間、妻側で3.75尺間に柱を立て、両妻側の天秤梁と中央の曲り梁に渡された牛梁（地棟）に、登り梁をそれぞれ架けて棟木を支えています。この巨大な自然木の松材を巧みに利用した曲り梁が優れた意匠となり、これを用いて牛梁を受けている構造がこの土蔵の特徴といえるでしょう。



写真2 2階内部と梁組

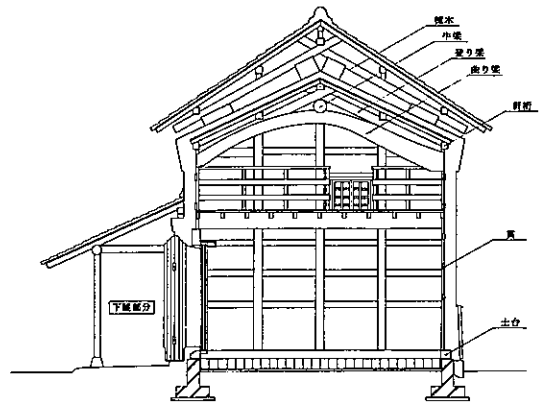


図1 旧浦野家住宅土蔵・断面図

一方、この蔵の建築年代については、記録、棟札、墨書等の手掛かりになる史料が発見されなかったため、正確な年代を知ることにはできません。しかし、浦野家の言い伝えに、九代目桑次郎が商いを始めたころに建てられて、この下屋部分で商いが行われていたという伝承もあり、江戸時代末期の嘉永から安政年間（1848～1859）頃に建てられたものと推定されます。

移築復元にあたっては、この蔵を主屋の付属屋として位置付け、屋敷配置を行いました。単に当初復元の保存をするのではなく、今後の活用にも重点を置きました。

外観については、旧状に復して屋根を置き屋根形式の棧瓦葺きに、壁を漆喰仕上げとしています。しかし、内部については、1階の床を瓦タイル敷きとし、民具類の展示や映写室にあてています。また、2階の床を一部吹き抜けとしましたが、これはこの土蔵の特徴である曲り梁が見られるように配慮したものです。

なお、浦野家では大正9年頃から電気がつくようになりましたが、これは次大夫堀用水にあった水車を利用して電気を起こしたものでした。当時の喜多見村には、まだ電気が通っていなかったことから、浦野家に灯された電灯は、村でも大層評判になったそうです。

区文化財資料調査員 高橋 誠

(1) 平入りとは、建物の長手側（平側）に入口のあることをいいます。